

言葉がもつ価値を知り、豊かに表現できる生徒の育成

～「より伝わるようになった！」という実感を得られる授業を通して～

飛驒市立古川中学校 教諭 澤上 由枝

【概要】「すごい」「やばい」今の中学生は、毎日同じ形容詞を使って自分の感情を表現している。友達や家族との会話や日記など、言葉を使う場面は一日の中で多く存在するが、言葉はなぜか増えていかない。日本には、古から伝わる素敵な言葉が多く存在している。しかし、生徒達はそれらを知らず、「すごい」「やばい」という汎用的な言葉だけで生活している。しかも、そのことに何の不便さも感じていない。私は国語の教員として、生徒達が先人たちの残してくれた多くの素敵な言葉に出会い、その言葉の価値に気付いてほしいと願っている。また、それらの言葉を実際に日常的に使えるようになってほしいとも願っている。その願いの実現のためには、生徒達自身が今の語彙の乏しさを認識すること、生徒達の表したい思いにぴったりの語に出会うこと、その語を使って表現してみること、新しい語を用いることで表現力の向上を実感し、言葉の価値に気付くことが大切だと考えた。中学3年生を対象に、『俳句の可能性』『故郷』『慣用語・ことわざ・故事成語』3つの単元を通して、実践を行った。

1 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

現在、日本で新しく誕生する言葉の多くは「短く略すること」や「汎用性の高さ」を目的として作られた言葉である。例えば「それいいね」という意味で「よき」という言葉を用いたり、「感動した」という意味で「すごい」という言葉を用いたりしている。言葉は文化とともに変化し、進化していくものである。しかし、日常的に使う言葉がこのような語に偏ってしまうのは危険だと感じる。日本人は、美しいと感じたものを、「可憐だ」「美しい」「儂げだ」など様々な表現で表すことができる。なぜなら、日本人は大昔から俳句や短歌、詩などで自分の感じたことを的確に表現しようと、様々な語を吟味し駆使してきたからだ。

誰もが簡単に、いろんな場面で使える言葉だけで生活するようになると、そういった先人たちの残してくれた言語感覚が途絶えてしまう。

このような現状から、国語の授業では、言葉一つ一つの価値に気付き、書き加えたり比較したりしながら豊かに表現できる生徒を育成していくことが必要なのではないかと考えた。

(2) 教科の目標から

国語の教科では、育成するべき資質・能力について次の3つを挙げている。

- ・社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。

- ・社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。

- ・言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

今回はこの3つ目の目標に着目する。言葉の価値を知り、豊かに表現できることは、将来社会生活の中で生き抜くために必要かつ求められている力だと分かる。

(3) 生徒の実態から

今年度授業を担当している3年生2クラスの生徒は、課題に向かって真摯に向き合える生徒が多くいる一方、もっと国語の力を伸ばしたい、良くしたいという向上心を持って取り組んでいる生徒は少ない。

日常会話では、「やばい」「すごい」など汎用的な表現を使う生徒が多い。日記などの書き言葉では「楽しかった」「すごいと思った」など似たような形容詞を用いて、自分の思いを表現する生徒が多い。

国語の授業では、書くことに苦手意識を持ち、「どう書いたらいいかわからない」「自分の書いたものが良いのかかわからない」と自分の感じたことを表現するのを躊躇する様子が見られる。

このような生徒の実態の原因は、2つあると考える。1つ目は、**生徒の知っている語彙が少ない**ことである。前述したように、生徒の日常会話は

簡略化の一途をたどっている。そのため、語彙を増やす経験は、読書体験の多さや、生徒が普段関わっている友達や大人の語彙に依存するものが大きい。そのような経験の差が、生徒の語彙力に大きな差をつける。

2つ目は、自分たちの表現力に満足しており、「もっとよくしたい」という課題意識が少ないことだ。語彙を増やそうという意欲がないことである。生徒たちの多くは、「楽しい」「すごい」「やばい」など汎用性の高い言葉で表現することに抵抗がなく（そもそもその不便さに気付かず）生活している。そのため、日記や国語の授業で表現する際に、そのような語彙で既に「自分の思いを書ききれている」と思っている。「もっとよくしよう」という思いを抱けず、語彙量を増やすこともできない。

このような実態から、生徒が豊かに表現できるようになるには、自分たちが普段使っている言葉以外に、こんなにも素敵な言葉があるのだと知ること、自分の伝えたい思いにぴったりの言葉を多くの言葉の候補の中から選ぶことが必要であると考え、研究主題を「言葉がもつ価値を知り、豊かに表現できる生徒の育成」と設定した。

2 研究仮説

多くの言葉を知り、その言葉の候補の中から、言葉の意味、働き、使い方等に注目して、どの語が自分の伝えたい思いとぴったり合うか吟味する活動を通して、「より伝わるようになった!」という実感を得られれば、言葉のもつ価値に気付き、豊かに表現できるようになる。

3 研究内容

(1) 表現力を向上させるための手立て

- ①自分の伝えたい思いの明確化
- ②語彙を増やすための視点
- ③言葉を吟味する活動
- ④表現の向上を実感させる手立て

(2) 表現力を豊かにするための手立ての工夫

- ①言葉の面白さに気付く読み取り
- ②作者の伝えたい思いの明確化

(3) 実際に豊かに表現するための工夫

- ①自分の表現の課題を明確化
- ②表現する活動
- ③実践的に表現する活動

4 研究実践

(1) 表現力を向上させるための手立て

生徒らの表現を豊かにするためには、語彙を増やす経験を積むことが必要であると考えた。また、現状の語彙数の乏しさに気付く必要もある。なぜなら、なかなか伝えたいことが伝わらないという実感をもつことが、国語を学ぶ意義に気付き、「もっとよくしたい」という意欲につながるからだ。

3年生の国語の教材に『俳句の可能性』がある。俳句は五・七・五の十七音で表現する日本で一番短い詩である。そのため、あれもこれも欲張って描くことができず、何こそを伝えたいのかを明確にする必要がある。また、たった十七音で個性を出さなければならないため、みんな似たような表現を使うわけにはいかない。俳句は「季語」を入れる有季定型が基本であり、どんな「季語」を用いるか、そもそもどんな「季語」があるのかを知り、選ばなければならない。生徒の「うまく表現できない」「ぴったりの言葉が浮かばない」という困り感が生じやすく、「もっと良くしたい」という思いを抱きやすいのではないかと思い、この単元での実践を行った。

①自分の伝えたい思いの明確化

『俳句の可能性』の単元は、全5時間で行うこととした。第1時に、「最後に一人一人俳句を作り古中俳句大会にて俳句を掲示すること」「学校中の先生方に読んでもらい、それぞれの先生に情景や思いが伝わってくる俳句の一つを選んで賞をつけてもらうこと」を伝え、単元の見通しを持たせた。さっそく俳句を作らせてみると、「何を題材にすれば良いか分からない」「なんとなくできたが、これが先生に選ばれるような良い俳句か分からない」などという声があった。そこで、次の授業までに俳句で詠みたい情景を決め、題材となる情景の写真を撮り、ロイロノートに提出することを宿題とした。生徒は自分の詠みたい情景を楽しんで写真に撮ってくる様子が見られた。

また、その写真をもとにして、「詠みたい瞬間のエピソード」を、ロイロノートのYチャートを使って書き込ませた。(写真1)



「夏の蒸し暑い夜に

【写真1 Yチャート】

鳴いている虫のことを表したい」のように、その情景から自分はどんな思いを抱いたのか書けていない生徒と、「家の前の田んぼに緑が増えているのを見て、夏だなと感じた」のように、情景と思いを結び付けて文章にできる生徒がいた。どちらの生徒もこの文章にする作業を通して、自分の伝えたいことが少しずつ明確になっていった。

②語彙を増やすための視点

単元の初めに俳句を作った際、「なんとなくできたが、これが良い俳句か分からない」という声があったため、第2時にはどういう俳句が良い俳句なのかということを様々なアプローチによって明らかにしていった。

まずは教科書の『俳句の可能性』『俳句を味わう』を読み、「切れ字によってこれ以上言い尽くせないという感情が伝わってくる」ことや、「ぽぽという擬態語によってわたげの軽やかな感じが伝わってくる」など、俳句の表現のレパートリーを増やしていった。

次に、夏井いつき先生が俳句の査定を行うことで知られるテレビ番組『プレバト』の一部を生徒たちに紹介した。すると、「季語が重なると伝えたいことがぶれてしまう」ことや、「誰もが詠める俳句ではなくその人らしさが表れるような言葉を選んだほうが良い」ことなど、良い俳句の言葉選びの仕方を学ぶことができた。

この2つのアプローチから、「良い俳句ってどんな俳句かな？」という問いについて生徒の考えを出させた。その結果、季語、オノマトペ、比喻など全部で以下に示す8つの視点が挙げられた。

【俳句を作るコツとその効果】

- ①句に適した季語を用いることで、気持ちが伝わりやすくなる。
(季語かぶり×、感情は季語に代弁してもらう)
- ②オノマトペ(擬態語・擬音語)を使うことで、気持ちが伝わりやすくなる。
- ③比喻を使うと、読者がその瞬間をイメージしやすくなる。
- ④切れ字を使うことで、言い尽くせない思いを表し、余韻を残すことができる。
- ⑤体言止めや倒置法を使うことで、句の余韻を残したり語を強調したりできる。
- ⑥適した助詞や接続詞、副詞等を選ぶことで、伝えたいことが焦点化される。
- ⑦視点を移動させることで、句に奥行きが出る。
(広い視点から焦点化、狭い視点から広げる)
- ⑧意味の重なりをなくすことで、他の情報を句に入れることができ、

より具体的に描くことができる。(言葉の選択)

第3時以降には、この8つの視点を黒板に大きく掲示し、良い俳句を作る際の目安となるようにした。

③言葉を吟味する活動

第3時に自分なりに俳句を作り、自分の伝えたいことをYチャートでまとめ直し、第4時では、自分の作った俳句が、自分の伝えたい思いを表したものになっているか確かめるために、小集団による交流を行った。この小集団は、先述した8つの視点の中で同じ視点に着目し、俳句を作った生徒3～4人で構成した。

まず、お互いの俳句を読み合い、俳句で伝えたい情景や自分の伝えたい思いをYチャートを用いて相手に話



【写真2 交流の様子】

そして、相手からアドバイスをもらった。「この季語以外にこの俳句にぴったりの季語ってあるかな？」と小集団の仲間と一緒に歳時記を繰る様子や、「この俳句じゃ伝えたい情景が浮かんでこないよ。こういう情報も入れた方がいいんじゃない？」と具体的にアドバイスをする様子が見られた。Kさんは最初「汗拭い掛け声響くグラウンド」と俳句を作っていたが、仲間との交流後「炎天下掛け声響く土香る」と推敲した。「毎日汗を拭いながら、最後の大会に向けて頑張っている様子」という自分の伝えたい瞬間を、「炎天下」という季語や、「土香る」という情景描写によって見事に表現できている。それまで一人で俳句に向き合い、言葉に向き合っていた生徒達は、この小集団での交流を通して、他の人に伝えるにはどうしたらよいかと真剣に考えるきっかけができた。この考え方は、本研究テーマである「豊かに表現する」ために必要な考え方である。自分の今までの表現に満足しているとそれ以上豊かな表現は生まれない。他の人に読んでもらい、意見をもらうことで、自分の気付かなかった「伝わらなさ」を実感し、「他にはどんな表現ができるだろう」という思考につながることができた。

④表現の向上を実感させる手立て

第4時の終末には、仲間と共に考えた結果出来上がった俳句を、Yチャートの右側の枠に当てはめ、最初に自分の力で作った俳句と見比べられるようにした。(写真1参照) そうすることで、自分の表現の変化を視覚化し「よりよくなった」と実感できるようにした。

①～④の実践を通して、五・七・五という限られた文字数の中で生徒一人一人の表現を見つめ直し、磨くことができた。特に季語グループでは、自分の伝えたい情景・思いにぴったりな言葉を歳時記やタブレットで探す活動を通して、多くの語に出会い、語彙を確実に増やすことができていた。

出来上がった俳句が良い表現となっているかは、あくまで主観的評価である。しかし、より伝わるにはどうしたらよいただろうと言葉を吟味する過程こそ、語彙を増やすうえで大切に、楽しい作業なのである。今回は様々な言葉と出会い、吟味する楽しさを実感できたことは大きな成果となった。

(2) 表現力を豊かにするための手立ての工夫

表現力を豊かにするためには、様々な文学的文章の中で、作者が伝えたい思いをどんな言葉でどのように表現したかに着目し、一つ一つの語彙の持つ力や表現する楽しさ、面白さを実感させることが大切である。

『故郷』という作品の中には、生徒を惹きつけるような様々な表現がある。また、魯迅が故郷という作品を書いた背景には、その時代に生きる民衆に伝えたい強い「思い」があった。それらに迫る活動を通して、言葉の持つ力、表現する楽しさについて生徒に実感させたいと考え、本単元を研究の題材とした。

①言葉の面白さに気付く読み取り

最初の感想で多くの生徒を惹きつけた登場人物は、ヤンおばさんである。ヤンおばさんの何が生徒達を惹きつけたのだろうか。ヤンおばさんの描写に着目していくと、「頬骨の出た」「唇の薄い」「まるで製図用の脚の細いコンパス」のような「五十がらみの女」などの表現に気付く。これらの表現は一見冷静に容姿を分析しているようにも見えるが、そこには主人公のヤンおばさんを見下すような態度が大いに反映されている。近所に住んでおり、かつて自分を可愛がってくれたおばさんに

対して、「五十がらみの女」はひどい。「五十くらいの女」ではダメなの？と生徒に問い返すと、「それでは迅ちゃん(主人公)の感情が伝わらない」と、答えが返ってきた。たったこれだけの表現の違いでも、伝わってくる感情は異なると実感することができた。

また、他にも、昔と今のルントウに対する感情の違いを、同じようにルントウの描写一つ一つに着目しながら読み取っていった。「艶のいい丸顔」という描写だけで、昔のルントウの裕福さや主人公からルントウに対する憧れの思いが伝わり、「古ぼけた毛織りの帽子」「でくのぼうみたいな人間」という描写から、今のルントウの貧しさや主人公のルントウに対する軽蔑心が見て取れる。

生徒は故郷で出会う初めての表現に驚き、楽しむことができた。

②作者の伝えたい思いの明確化

作者の魯迅、そして原文を翻訳した竹内好は、この作品を通して何を伝えなかったのか。作品の最後に突然出てくる「道」や「希望」という語をあえて使いながら、読み手に主張する作者の表現力を味わわせる授業展開を考えた。

この単元では作品を読む前にあえて作者魯迅について調べ学習をし、『故郷』という作品が生まれた時代背景を考えた。生徒は「辛亥革命で生活が安定していないから、明るい故郷に戻ってほしい」「魯迅自身が日本で学んだことを生かし、中国人の封建社会への考え方を変えたい」ということを、この『故郷』で主張するのではないかと考えた。

しかし、実際に本文を読みすすめる中で、「想像と違って、あまり主張が分からない普通の話だった」「この『道』という表現がポイントなんだろうけど、なぜこんなに分かりにくくしているのだろう」という、感想をもった。

ここで、この時代の中国では、出版物にも厳しい検閲が入り取り締めりがあったことを資料をもとに伝えた。しかし魯迅は、「革命後も貧しい生活は変わらないのは、まずは民衆の考え方を変えなければならぬ」と感じ、あえてストレートな主張ではなく、検閲にかからないように、「道」という表現や、様々な登場人物の設定をすることで、民衆の心を動かした。この話を聞くことで生徒達は、これまで使ってきたストレートな表現ではなく、人物の描写や情景描写などによって、思いを

伝えることができる実感できた。

『俳句の可能性』で自分の思いをより伝えられる表現を考え、『故郷』で読み手の心をつかむ表現力のすごさを実感することができた。しかし、ここで学んだことは、あくまでも「俳句や物語の中の世界」という思いが強く、なかなか「日常生活」へ意識が向かえる生徒は少なかった。

(3) 実際に豊かに表現するための工夫

実際に、生徒が身に付けた語句を用いて表現するためには、授業内で完結してしまう短文づくりだけでなく、日常的に短文を作るような習慣づけが必要である。3年生の『慣用句・ことわざ・故事成語』では、慣用句やことわざの様々な語句の意味を理解し、短文をつくる活動に取り組む。生徒が今後も学んだ語句を使っていけるようにするには、より実践的で応用的な活動が必要であると感じた。

①自分の表現の課題を明確化

そこで本単元に入る前に、毎日生徒が書いている日記を持参させ、自分の日頃の表現を振り返った。多くの生徒が「毎日似たようなことを書いている。」「疲れたしか書いていない。」など自分の日記に満足していない様子であった。

本単元では、日記をレベルアップさせることが目標だと伝え、もっとよくしたいと思う日記をいくつか選び、ロイロノート内に写真で残させた。例えばTさんは「テストがほぼ返ってきたんですけど、英語がめっちゃ低くてめっちゃショックでした。」という日記を写真に撮っていた。

②表現する活動

次に、ロイロノートを用いて日記をレベルアップさせる練習を行った。まずは、全員に同じ「テスト勉強疲れた。」という例文を提示し、『疲れた』という言葉は便利だけど、いろんな疲れたがあるよね。問題の意味が分からない、お手上げ！という意味の『疲れた』もあるだろうし、手が腱鞘炎になりそうとか、毎日勉強遅くまでやっついて寝不足だっという肉体的な『疲れた』もあるだろうし、そういう自分だけの『疲れた』を表現するのに便利なのが、慣用句やことわざですよ。」と伝えた。そして、慣用句を用いて自由に例文を書き換えさせた。すると、「何度やっても図形の問題

には手も足も出ない。」や「テストまであと一日あるなんて身が持たない。」などよりの確に『疲れた』を表現できた。

さらに、自分の過去の日記をよりよくする段階に移った。それぞれ自分の日記を読み返し、その時の思いを思い出しながら、便覧やタブレットで、自分の感情にぴったり合う慣用句やことわざを調べて、書き換えていた。先ほど挙げたTさんは、「英語のテストが帰ってきたけど、英語の点数が低くて目を疑いました。もう目をつぶっておきます。」と日記を書き換えた。目を疑うという慣用句を用いることで、点数がこんなに低いとは予想しておらず驚いている様子、目をつぶるという慣用句で、見て見ぬふりをしたい、いっそのこと忘れてしまいたいという心情が伝わってくる。取り組んだ全ての生徒が、「なんかいい感じの文章になった!」「前の文章よりかっこよくなった!」と手応えを感じていた。

③実践的に表現する活動

②の授業後、「明日の日記からぜひ慣用句やことわざを使ってね。」と声をかけたが、その後の日記に変化があったのは2クラス約60人中30名程度であった。そこで新たに手を打つことにした。

『慣用句・ことわざ・故事成語』の単元が終わった2クラスにミッションカードを配布した。今週

の日記に
使ってほし
い慣用句や
ことわざ、
故事成語を
書いたオリ
ジナルのカ
ードであ

〈澤上からの今週のミッション〉

今週の日記にこの3つの言葉をどこかで使うべし!

①知らぬが仏(便覧P255)

…知らないているため、平気でいられること。

②言葉に余る(便覧P259)

…とても言い尽くすことができないこと。

③登竜門(便覧P217)

…立身出世への難しい関門。

る。できるだけ 【写真3 ミッションカード】

日記で使えそうな言葉を便覧から選び、使い方が分かるよう意味も載せた。

その結果、8割の生徒がミッションカードに書かれた語を使って日記を書くことができた。例えばYさんは、「この間『七つの大罪』の続編の本を読みました。いや、もう、言葉に余るくらい面白かったです。この本の元ネタは『アーサー王物語』で、英語で書かれたものらしいです。読みたかったけど、私は英語が読めないの、知らぬが仏ってやつですね。」という日記を書いてきた。Yさんのこれまでの日記は、長く書けているものが多い

ものの、感情を表す言葉が「すごい」「疲れた」の大きく2種類しかなかった。このような日記を書けたことは大きな進歩であった。

このミッションカードは、11月、12月で2回配布し、多くの生徒の日記をレベルアップさせることができた。

5 研究のまとめ（成果と課題）

これらの研究を通して実感したことは、語彙は授業だけで身につくものではないということだ。私たちは生活の中で多くの語を用いている。朝の家族との会話、学校での友達との会話、毎日書く日記などなど。それらの場面で、「試しに使ってみる」ことをしなければ、せっかく学んだ新たな語彙は、すぐに忘れ去られてしまう。

	1位	2位	3位
楽しかった単元	『握手』33人(56%)	『故郷』27人(46%)	『作られた物語を超えて』24人(41%)
国語の力がついた単元	『故郷』28人(47%)	『慣用句・ことわざ・故事成語』26人(44%)	『和語・漢語・外来語』21人(36%)

12月に2クラス(59人)にアンケートを実施した。3年生のこれまで学習した単元で楽しいと思った単元を聞くと、『故郷』を挙げた生徒が27人と約半数いた。また、国語の力が高まったと思う単元を聞くと、『故郷』が28人、『慣用句・ことわざ・故事成語』が26人いた。実際どんな国語の力が高まったと感じるか聞くと、「俳句では、自分の考えを表現するときに大切になる伝え方や表現方法を高めて、自分の書き方に取り入れることができた。」「故郷では、本文に直接的に書かれていない登場人物の心情を、描写からこういう思いなのかなと考えて理解する力が高まった。」「自分が今まで知らなくて使ったことのなかった故事成語やことわざ、慣用句を見たり使ったりすることが出来るようになった。」という意見があった。

また、ミッションカードに取り組んでみてどうだったかという質問に対しては、「自分の表したい言葉をことわざや慣用句、故事成語で表せるようになり、毎日の日記が少し面白くなりました。」「初めはどこにどう入れればいいかとか慣れていなくて難しかったけど、取り組んでいくうちにだんだん分かってきて、日記の質が前よりも断然よくなって、自分の知らない言葉が知れて少し賢くなっ

たと思えて嬉しくなった。」「いつもよりも日記を書いているという感じがしました。」など前向きな感想が多く見られた。自由記述の振り返りにも「授業でことわざや慣用句、俳句、古文などを習って、これまで知らなかった言葉の意味を知ることができ、そのお話の面白さや味わいをより感じる事ができ、言葉のもつ力を実感できた。」という意見もあった。

『俳句の可能性』では、多くの美しい語に出会い、表現する楽しさを実感させることができ、『故郷』では、一つ一つの語がもつ力、影響力を実感させることができた。このように、様々な学習を通して、表現の語彙を増やしたことで、「もっと思いを伝えられる表現をしたい」という向上心を生徒にもたせたことで、「どの語が自分の伝えたい思いにぴったり合うか」を意識しながら、日記や作文を書いたり、日常会話の中で表現を気にしながら話したりする姿が見られるようになった。「〇〇さんの炎昼って言葉はかっこよかったな。」「次は『腕が鳴る』って慣用句を日記で使ってみよう」と、意欲的に表現できるようになった生徒の姿を、とてもうれしく思う。

しかし、国語で会得した「豊かな表現」を、まだまだ日常生活に活かすことができない生徒もいる。「これは物語の中の表現だから」「俳句の時は使えるけど生活では使えない」という考えがあるからだろう。中でも成果の見られた『慣用句・ことわざ・故事成語』であったが、まだまだ教師が指定した日記以外の場面で使っている生徒はあまりいない。つまり、今後の授業では、このような語彙力、豊かな表現力の向上を実感できる生徒をどれだけ増やせるかが課題である。

生徒が最も活用できたミッションカードを日記以外にも「日常会話」や「スピーチの授業」に活かすことで、より身近に表現できる力を育てていきたい。

子ども達が多く素敵な語句に出会い、表現する楽しさに気づけるよう、今後も教材研究を続けていきたい。